

お土産を持って見回りに来てくれる度に「元氣になったね」と慰めてくれました。

お正月が過ぎ、いつ帰国できるかも知れないし、いつまでも人に頼ってばかりいられません。何とか現金収入を得ようと考えていたころのことです。

お店で、三津ちゃんがお客さんから「歌を歌え」と言われ「絵は描けても、歌は歌えないわ」と断りました。

すると、今度は私に「歌ってみなさい」と言うのです。

「私は下手よ」と答えると、お母さんから「歌ってみなさいよ」と言われて、恥ずかしさをこらえて日本の民謡を歌いました。お母さんが「お金をもらってあげる」と、いくばくかのお金を頂きました。

そこで、私の歌でお金がもらえるならと恥を忍んで歌うことにし、何か月かが過ぎました。日本の女性が歌うとの風評を聞いて、次第にお客さんも増え、お母さんも喜んでお金をもらってきてくれました。

長屋に戻ると、子どもが「今日も、おじいちゃんがお土産を持ってやって来て、一度、お母さんに会いたいと言っていた」と言うのです。すでに七月になり、青汁のおかげで夏負けもせず、終戦後一年を迎えようとしていました。そのころになって、初めて生きていてよかったと思えるようになっていました。

わざわざ、オボジが会いに来て「日本人はシベリアに連れて行くとうわさがある。南（韓国）の方へ逃げなさい」と知らせてくれました。逃避行の決行日に金波楼へ、その

ことを告げに行くと、いろいろと食べ物を作って持たせてくれました。とうとう、オボジに会う時間もなくなり、お母さんに「よくお礼を言っておいて下さい」と頼んで、お別れしました。

その日、私は主人に長い髪を切ってもらいました。耳をふさいでいても、ハサミの音に泣けてたまりませんでした。

預けていた娘を迎えに行く主人には「汚い帽子と上着をもらってきて下さい」と頼みました。主人がいなくなつてから、アカシアの根元を深く掘り、髪の毛を埋めました。

娘を連れ戻った主人は「才さんの妹さんが、娘にチョゴリを着せ、帰したくないと泣いていた」と聞かされました。皆さんに可愛がられて暮らしていたとのこと。私は、お